

1995年 8月10日 第3種郵便認可(毎週1回 水曜日 発行)
2022年 3月10日 発行 SSKS 通巻 第8430号

SSKS

2022年
1995

3月10日
8月10日

発行

SSKS
通巻

第8430号

水曜日
発行

細かい作業が得意です！刺繡(刺し子)作業(府中生活実習所：1グループ)

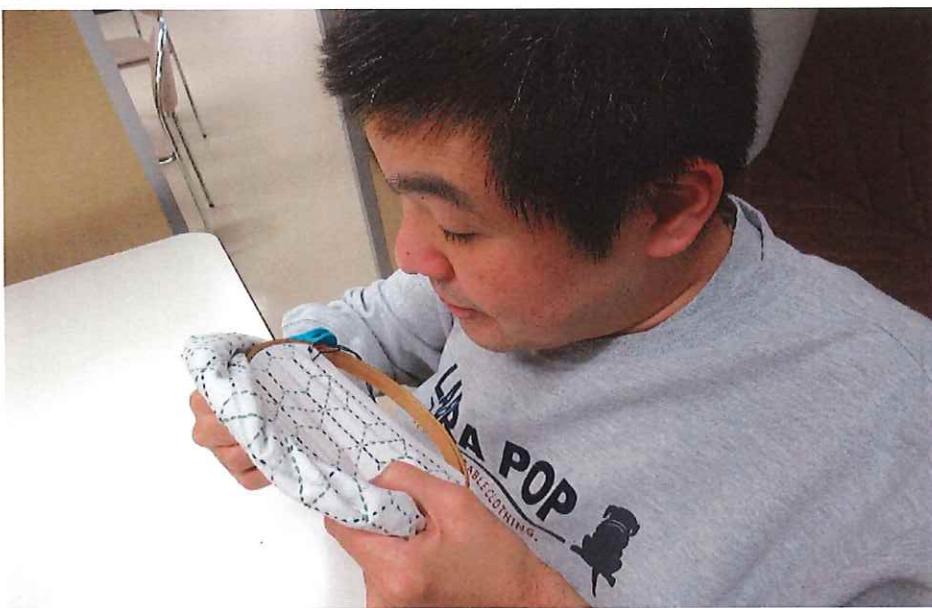
障害者団体定期刊行物協会

発行所

東京都世田谷区祖師谷3-1-17

定価50円

3月号



あけぼの つうしん

社会福祉法人あけぼの福祉会 <http://akebono-fukushi.com>

- 府中共同作業所(法人本部) 〒183-0056 東京都府中市寿町3-3-6
TEL: 042-367-0640 E-mail: kyoudous@akebono.fuchu.tokyo.jp
 - ワークセンターこむたん 〒183-0056 東京都府中市寿町3-3-6
TEL: 042-306-8639 E-mail: komutan@akebono.fuchu.tokyo.jp
 - 府中生活実習所 〒183-0005 東京都府中市若松町5-2
(短期入所事業併設) TEL: 042-363-5251 E-mail: f-seijitu@akebono.fuchu.tokyo.jp
 - 地域生活支援センターあけぼの 〒183-0056 東京都府中市寿町3-9-11山上ビル1F
TEL: 042-358-1085 E-mail: siencenter@akebono.fuchu.tokyo.jp
 - ホームヘルプステーションきぼう 〒183-0056 東京都府中市寿町3-9-11山上ビル1F
TEL: 042-352-0630 E-mail: kibou@akebono.fuchu.tokyo.jp
- グループホームペんぎんはうす 〒183-0056 東京都府中市寿町3-9-11山上ビル3,4F
(グループホームあけぼのユニット) TEL: 042-319-8915 E-mail: pengin@akebono.fuchu.tokyo.jp
- グループホーム樹林の家 〒183-0026 東京都府中市南町6-52-10
(グループホームあけぼのユニット) TEL: 042-319-2268 E-mail: kirin@akebono.fuchu.tokyo.jp
- あけぼのショートステイ 〒183-0056 東京都府中市寿町3-9-11山上ビル2F
TEL: 042-319-8917 E-mail: akebonoshort@akebono.fuchu.tokyo.jp

●印の事業所のメールアドレスが変わりました。

今月の特集



平和であってこそ



テレビからの映像で

日本国内では未だに新型コロナウィルス感染症の収束の見通しが見えない状況が続き、連日ニュースのトップに報道されてきました。しかし、2月24日以降は、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻がニュースのトップで報じられています。武力による他国への侵攻はどんな理由があろうと許されることではありません。クラスター爆弾などで、爆弾1発で何百人の大切な命が一度に奪われており、テレビでの爆破の瞬間の映像や建物が破壊された映像を目にするとき、胸が張り裂けそうな衝撃と悲しみ、そして怒りに襲われます。壊れた建物の下には沢山の奪われた命が横たわっているのです。

戦争に勝者はいない

これまでの人類の戦争の歴史を顧みる時、領土などを巡って国家と国家の間で

戦争が起こりますが、戦争でいくら敵国を打倒しても、そのもとで暮らす国民を守ってはくれません。

また、今回のように明らかな侵略侵略であっても、戦争を起こす側は「自分の国を守るために」と戦争を正当化してしまいます。ヨーロッパの国々は日本のような島国ではなく陸続きのため、隣国はいつも脅威となります。そのために軍備を増強することになりますが、それを受け隣国は自国の防衛のため隣国以上の軍備を強めようします。つまり、軍事力の増強合戦には終わりがないことになります。そして、ロシアがそうであるように国家予算には限界があるため、軍事費が増えれば増えるほど社会保障に充当できる財源が減っていき、障害のある人や高齢者や子どもなど社会的弱者の福祉に充当する予算が減額されていく結果になっています。



戦争下での障害のある人の暮らし

ロシアによる軍事侵攻を受けてウクライナの国民が西側隣国への避難が続いています。その数「数百万人」と言われています。この様子がテレビで何度も報道されていますが、避難している沢山の人々のなかに、高齢者や障害のある人（外見だけでは判断できませんが）例えば車椅子を利用している人などは全く見ることができません。

ヨーロッパの障害者団体を取りまとめている「欧洲障害フォーラム」の発表では「ウクライナの 270 万人の障害者は避難所に行くこともできず家にいます。」「障害のある人は施設に取り残されています。」などと発表しています。戦争によって最も大きな被害を受けるのは、いつも障害のある人であり、高齢者であり、子どもなのです。障害のある人は戦争の中では生きていくことが許されないのかを感じてしまいます。日本でも第二次世界大戦時には、障害のある人は「非国民」や「ごく潰し」と言われた歴史があります。



今、私達にできることは

遠く離れたヨーロッパの障害のある人への支援として私たちに何が出来るので

しょうか。

まず、戦火の中でいつ命を失うかもしれないという極限状態で暮らしている障害のある人の実態に目を背けず、その現実をしっかり受け止めること。

2つめには、いかなる理由があろうと戦争をしてはいけないという世論を国内で、さらに世界に向けて発信していくこと。

3つめには、日本政府や国際 NGO に対し、ウクライナで最も困難に直面している障害のある人などへの支援を強化することを要請していくこと。

4つめには、「ウクライナの障害のある人のために役立てる」趣旨でウクライナ大使館への寄付をおこなっていくことです。

今後、「日本障害者協議会」から具体的提案があると思います。また、今回改めて戦争の残虐さと悲惨さに直面し、日本が戦争を起こさない、巻き込まれないために日本国憲法を堅持していくことの大切さを痛感させられました。



NO WAR! 戦争反対!



府中共同作業所

食事の環境を整える



～自分の力で食べられる合理的配慮～

府中共同作業所では、どんなに重い障害があっても食事を楽しめるように、食べやすい食事形態に工夫した給食を提供しています。しかし、障害のある人の食事環境は、食事形態を工夫するだけではクリアできない課題があります。器やスプーンなどの食具、姿勢を工夫することで、無理なく楽しく食べられる食事に関する環境整備について紹介します。

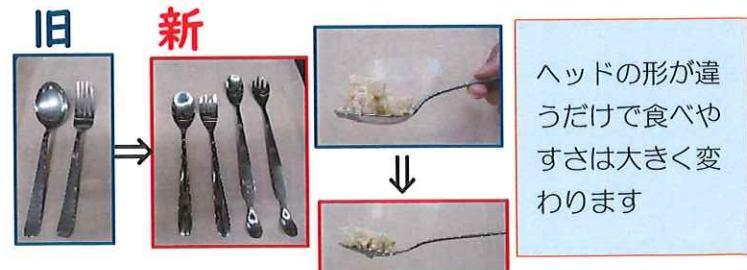
食具の工夫

Aさんは、自分でスプーンを使って食べています。器用に手先を動かしながらスプーンですくいますが、スプーンのヘッドが大きく口の許容量を超える量がスプーンに乗ってしまうため、頬張るように取り込んでいます。上手く口に入らずこぼれてしまうこともあります。平皿に盛られたメイン料理は、スプーンをひっかけることができないので、すぐおうとした食事がスプーンに押されてこぼれてしまったり、最後の一囗がどうしてもきれいに食べられなかったりします。食事中に何度も「あれ・・・」という言葉を発しながら一生懸命すくって食べようとしています。最後の一囗は、近くにいる職員に「ちょっとすくえないので手伝ってください」とお願いしています。

食具が使いやすければ、誰にも頬ららず自分で食べられるはずなのに・・・。Aさ

んの食事の様子を見ていて作業所の器やカトラリーの環境整備を進めなくてはいけないと考えました。

スプーン・フォークは、柄の長さ・太さが持ちやすいこと、重すぎないこと、ヘッドが深すぎず・厚すぎず・大きすぎないことをポイントに見直しました。2種類のシリーズを利用者の食事の課題に応じて使用しています。実際に使ってみると、2種ともヘッドの厚さが薄く、口に入れたスプーンがスッと口から引き出せます。Aさんに限らず、大盛に乗せて頬張っていた利用者達の一囗量が適切な一囗量に調整できるようになりました。フォークは口当たりが優しく、刺すだけでなくすくう操作も可能な形の物に変えました。



ヘッドの形が違うだけで食べやすさは大きく変わります

器は「スプーンですくって食べる」ことを前提に見直しました。これまで魚料理は角皿に、洋食のメインは丸い平皿に、と料理によって器を使い分け、器の雰囲気も含めて食事を楽しめる物を使用していました。和・洋・中どの料理でも違和感なく使えるシンプルなデザインだけど、

食べる動作に障害のある人が使いやすい器であることを優先に選択しました。

食具を見直したこと、Aさんは職員に頼ることなく自分の力で「いただきます」から「ごちそうさま」まで食べきることができます」とができるようになりました。「私の口にちょうどいいスプーンです」とか「家でもこのスプーンを使いたい」という利用者もいます。

食具は予算と相談しながら、数年かけて計画的に買い替えてきました



縁の角度がすくいや
すく設計された器

指が引っかかり持ちや
すく工夫された湯呑み



姿勢の工夫

Bさんの車椅子はひじ掛けが高く、食事のテーブルに当たってしまいます。そのため、テーブルとBさんの間に大きな距離ができてしまします。スプーンでくった食べ物をこぼさないよう、前かがみの姿勢になって食べています。無理な姿勢で食べることは、身体が疲れるだけでなく、噛む・飲み込む動作にも悪影響となります。正しい姿勢で、無理な負荷がかからない環境を整えるため、OTにアドバイスをもらいながら見直しました。

車椅子の調整をするのは難しいので、車椅子とテーブルの間を埋めるため手作りのカットテーブルを使うことにしました。さらに腕が動かしやすく、口で迎えにいかなくてもスプーン操作ができる高さになるよう食事台で調整をします。こうすることで、身体が傾くことなく、上手に

スプーン操作をして食事ができるようになりました。

姿勢が安定していることで、噛む・飲み込む動作にも余裕が見られるようになりました。



←身体が食べ物を迎えるにいつ
ていきましたが



姿勢環境を整えることで

↓スプーンやフォークを口に運べるようになります



肩の高さが
左右同じ
安定した姿
勢です

脳性麻痺などの身体障害のある人は、スプーンは使えるけど「適量をすくう」「こぼさないように口に取り込む」という細かい操作が難しい人が多くいます。一口量が多いとむせ込みや窒息の原因となることもありますし、使いにくい器で食べることで筋緊張が強くなり、食事動作による疲労も増してしまいます。基本の食具を誰でも使いやすい物にすることで、個別の細かい対応が必要な人が少くなり厨房の備品管理が楽になるというメリットも得られました。

使いやすい食具や、より良い姿勢で食べられる環境を整えることで、無理せず・安心して・自立した食事ができるのです。利用者にとって、楽しく安全な給食の時間となるよう環境調整も大切にしてきたいです。



法人設立30周年記念企画

社会福祉法人あけぼの福祉会は、おかげさまで法人設立から30年を迎えるとしています。30周年という節目を記念して、過去の「あけぼのつうしん」の記事等から、無認可時代を含めて法人の歩みを振り返っています。今回は2008年から2012年までです。



2012年10月「こむぎ工房」と「たんぽぽの家」を統合し、「ワークセンターこむたん」を開設しました。「ワークセンターこむたん」は、障害者自立支援法の生活介護事業、就労継続B型事業、就労移行事業の多機能型の施設（定員60名）として開設しました。（法人設立20周年記念誌「夢をかたちに 夢がかたちに」より）

2008年 第三次中期構想で「こむぎ工房」「たんぽぽの家」を統合し施設規模・機能の拡大計画発表

2009年 5月府中市より府中共同作業所に隣接する市有地貸与決定。新施設への理解や賛同・資金作りとして「夢をかたちにプロジェクト」スタート

2010年 新施設事業計画東京都への提出

2011年 4月東日本大震災支援のため法人より支援スタッフ派遣

2012年 新施設工事着工 10月新施設開所

新施設への理解や賛同・資金作りのための取り組みとして、あけぼの福祉会後援会による「夢をかたちにプロジェクト」がスタートしました。チャリティコンサートや映画会を行いました。



【編集後記】

今年度も今月で最後となりました。「今年度こそはコロナが落ち着いているはず」「秋にはみんなで行事もできるかも」との期待を胸に始まりましたが、ふたを開けてみればやはり、感染急拡大、落ち着いたと思ったらまた感染拡大の繰り返しとなった1年でした。やりたいことを諦めることも多く、利用者の方やご家族の方からも「休みの日は家でゆっくりしていた」とご報告いただくことが多くありました。そのような日常でも、それぞれの楽しみをみつけて暮らす日々に、改めてみなさんの適応力の高さや強さを実感した年となりました。

2022年度はこの状況が変わることを祈りながら、「今できること」は何かを大切に毎日の活動を続けたいと思います。

（ワークセンターこむたん 沢口久美子）

1995年
2022年
8月10日
3月9日
発行
SSKS
第3種郵便認可（毎週1回 水曜日 発行）
通巻 第8430号